井の頭自然文化園開園 70 周年記念
「わたしと井の頭自然文化園」エッセイ

思い出賞：上田祥士

わたしと井の頭自然文化園

大正末期に我が家はまだ畑の多かった吉祥寺に居を構えた。我家の前の道は富士見通りと名がついており、冬の晴れた日には今でも屋上から富士山が見える。今は亡き母の日記に「早朝、父と深澤さんご夫妻と井の頭を散策する。」とあった。昭和初期のことである。「父」とは母の父であるから存命ならば１２０歳、「深澤さん」とは我家の前に住んでいた「赤い鳥」のさしえなどで著名な画家、深澤省三・紅子夫妻である。その母が結婚し同じ敷地に住み、私が生まれた。

晩年の両親は毎朝井の頭公園でのラジオ体操を楽しみにしていた。「こんなに近くに素晴らしい公園があるのだから利用しない手はない」というのが口癖だった。両親に連れられて文化園に初めて行ったのは５０数年前のことである。文章を綴っていると、その時の感情が呼び起こされる。父を探して泣いている迷子の私がいる。どうしようもなく不安で寂しい気持ちが、動物の周辺の賑わいと共に思い出される。観覧車に乗り込む時の高揚した気分。そうだ、文化園の懸賞にあたって子供用の自転車をもらった嬉しい思い出もある。水生物館では金魚や水藻も売っていたのではないだろうか？朧気な記憶である。小学校の最初の遠足は文化園だったこと、苦手な写生を課せられたことなど徐々に記憶が蘇ってくる。

今でもよく文化園を利用する。フリーパスを毎年購入し、小さくて軽い双眼鏡を持ち、目的もなく自然の中を歩く。平日の昼などは動物舎を離れれば人通りも少なく、吉祥寺の雑踏からわずかしか離れていないのに、別世界のように静かな空間に浸ることができる。たまには自然は思いがけないご褒美をくれる。平成２３年６月、なんの前触れもなく、憧れの「サンコウチョウ」のメスが現れてくれた。噂には聞いていたが、繁華街から数百メートルのところでまさか出会えるとは。今でも明るい水色のアイリングが目に焼き付いている。文化園は博物館の意味合いを持っている施設（博物館相当施設）である。展示物だけでなく、その豊かな自然も、また我々に自然への畏敬を呼び起こさせる力を持っていると痛感した。

私の子供も文化園によく連れていったものだ。観覧車。回るティーカップ。赤や青の薄い回数券。必ずメガネが曇る植物園。お猿の電車があったような気がするが確かめるすべもない。そして歳月は過ぎ、孫ができた。明日は数十年来のお付き合い、象のハナコを見せに連れていこうか。